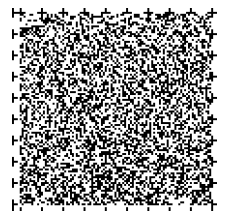


僕の手は四本指

中一

僕の左手の指は四本しかありません。僕は生まれつき左手の骨が一本足りませんでした。だから、親指が動きませんでした。僕は四才の時、父の仕事の都合で住んでいたカナダで、動かなかった親指を取り、人差し指を親指に移植する手術を受けました。

手術をすることを、両親はとても悩んだそうです。見た目が他の子どもたちと違うので、僕がいじめられるのではないかと心配だったそうです。しかし、カナダのお医者さんは、悩んでいた両親に、
「人間にとって、物をつまむことは大切なことです。見た目よりもこの子の将来を考えなさい。」と、言われたそうです。両親は、そのお医者さんの考えを受け入れ、僕の使えなかった左手を使える手にしようと思ったそうです。そして、僕は手術をして四本指の左手になりました。だからと



いって、両親は僕を特別扱いはしませんでした。もちろん、ほかの人もそうでした。カナダで、僕は、アイスホッケーとサッカーをやっていました。サッカーのコーチの娘さんは指が六本ありました。僕は、コーチから、

「あなたに一本あげられればいいのだけど、これは彼女のラッキーフィンガーだから、あげることはできない。」
と言われました。僕はびつくりしました。

カナダの人にとっては、障害のある人に親切にするのは特別なことではありませんでした。カナダの人は、障害もその人の個性の一部としてとらえていたと母が言っていました。

障害のある人もそれを隠すことはしませんでした。障害を不幸と思わず、明るく過ごしていました。そのお陰で、僕も手のことを気にせず過ごすことができました。カナダの学校では、いじめられることは全くありませんでした。みんなとても優しくかったです。小学校一年生の夏、日本へ帰国することになりました。知らない人の中に入って

いくことがとても不安でした。友達ができるだろうか、手のことでいじめられないだろうかなど、いろいろ心配でした。初めて学校へ行った日の自己紹介は、とても緊張しました。けれども、小さいころ遊んだことのあるA君がいたので心強かったです。両親も、僕が手のことを言われるのではないかと心配だったそうです。

しかし、その時の担任の先生が、学年全員に僕の手の話をしてくれたので、手のことでなにか言われることはありませんでした。みんな気にせず遊んでくれました。僕は、カナダにいた時と同じように楽しく過ごすことができました。それどころか、その後二回手術をして一年以上左手が使えなかった間、みんなはとても親切にしてくれました。

僕は指が一本ないだけです、僕より重い障害のある人は、世の中にたくさんいます。僕が周りの人にしてもらったように、そんな人たちに優しくしたいです。

僕の手の指は四本になったけれども、使えなかった左手が使えるようになりました。手術を勧

めてくれたお医者さんと、手術を決めてくれた両親にとっても感謝しています。そして、僕を特別扱いしなかったクラスのみんなにも感謝しています。周りの人々に言えなかったありがとうを今、言いたいと思います。
「ありがとう。」

